

# 北京のキャッシュレス事情

● 放 眼 日 中 ●



新型コロナウイルスによる肺炎騒ぎが起こる前、久しぶりに北京に行った。なじみのホテルの前にセブンイレブンができていたので、朝の通勤時間帯に飲み物を買に行つたところ、レジは長蛇の列。今や北京の若者は朝食をコンビニで買うので、肉まんを取り出したり、コーヒーを入れたり、店員は大忙しだった。その中で、現金で支払ったのは筆者ただ一人。他は全員スマホ決済だった。レジの店員からも、周囲の若者からも「このおじさん、一体どこ

の田舎から来たんだ。この忙しい時に現金出しているよ」という非難の空気が襲い掛かって来た。だが、こちらとしては、たった2、3元のドリンクを買うのに、いちいちスマホを出してパスワードを入れて、QRコードを読み取るのがそこまで効率的な作業なのか、と反論したくなる。

しかし、キャッシュレスというのは一度はまり込むと、もう後戻りできない便利さを感じてしまうのかもしれない。われわれの世代なら現金のやり取りの方がよほど早いのだが、中国の若者たちは明らかに感覚が違うのだ、と思ひ知らされた。知り合いが20年ぶりに北京に来たというので、天安門と故宮博物院に連れて行くと、どちらも事前のネット予約およびキャッシュレス決済が入場券を買う条件だ、と書かれており、これまた驚いた。これは外国人を排除しようとしているのか、それとも徹底したキャッシュレス化を推進し進め、合わせてセキュリティ強化も図っているということなのか。いずれにしても、外国人観光客が個人で北京の名所に入るのは今や至難の業、と言つてもよいかもわからない。そして、北京随一の繁華街・王府

井を歩いて疲れたので、懐かしの北京飯店で休むことにした。ロビーは非常に明るく、昔の面影はほとんどない。コーヒーショップでは、コーヒー1杯63元(約950円)もする。知り合いがごちそうしてくれるというので注文すると、ウェイトレスが小声で「実はきょう、ホテルのシステムでトラブルがありまして、現金は使えません、支付宝(アリペイ)などはお持ちでしょうか」と聞いてきて、意味が分からず困ってしまった。われわれが外国人だからで、今や中国人には絶対聞かない質問だった。筆者は使用可能な支払い方法を持っていたので、それを告げると、彼女はホッと笑顔になり「外サーブしてくれた。知り合いは「外国人が利用する北京飯店で、現金やクレジットカードが使えないのか」とかなりのショックを受けて黙り込んだ。ホテルのシステムのこととはよく分からないが、恐らくは現金やクレジットカードを処理するシステムが使えなかったのだらうとは思ふ。ただ、中国の友人によると「最近は何となく『現金お断り』という店も多い」とのこと、中国政府もさすがに「現金を受け取れ」と逆に指導しているという。もう何がどうなっているのか、全く分からない異次元空間に紛れ込んだ気分になった。

日本でも消費税増税に合わせてキャッシュレスへの移行が奨励されているが、その意に反していまだに現金を使う人を多く見掛けるのはなぜか。単に使い慣れているからではなく、社会全体の流れが大きくは変化しないということでは、とひそかに思つてしまった。



コラムニスト・アジアソウオッチャー 須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。